



荒廃のり面における景観維持対策について

要 約 農地や道路、造成地などののり面の抑草や景観維持について環境に配慮した緑化資材の利用が注目されている。そこで、ヒメイワダレソウを利用した緑化資材について既存ののり面における抑草や景観維持について、その効果を確認するとともに施工後の管理方法について研究を行った。

研究者 角所誠司
KAKUSHO Seiji

■研究の背景

農地や宅地、道路などののり面管理のための資材や工法の開発は盛んに行われている。しかし、いずれも建設や造成と同時施工で行われるものが多く、いったん雑草が繁茂してしまったのり面への対策事例は少ない。現状では、のり面の再整地を行い緑化資材を施工するのが普通であるが、新設時と比較すると多くの費用と労力を要することとなる。そこで、本研究では低コスト、省力化できる荒廃のり面の景観回復と維持管理の方法について検討することとした。

■研究内容

1) 目的

南淡路地域で特産化が図られているヒメイワダレソウをマット化した資材（「あわじ花マット」という）を用い荒廃した既設のり面での抑草効果や管理手法、景観維持効果などを確認し、今後の普及に役立てることを目的とした。

2) 研究の概要

のり面は、校内キャンパスののり面を利用し、年間1回程度の草刈りによる管理が行われてきた場所で6年を経過していた。のり面は、ヨモギやセイタカアワダチソウの大型雑草、エノコログサやイタリアンなどの中型雑草、カラスノエンドウやシバ類などの匍匐型雑草が多く繁茂していた。

まず、刈り払い機で既存の雑草を除草し、切り株の残った上に「あわじ花マット」のロールを敷設した。



整地前



整地後

その後、雑草の復元状況や景観維持効果などについて調査を進めた。景観維持効果については、目視によるもので調査者の主観に任せ判断した。また、作業に要した時間なども併せて調査した。



■ 研究の成果

荒廃のり面での景観維持について「あわじ花マット」の敷設のみでは、ヨモギやセイタカアワダチソウ、アメリカセンダングサ、カラスノエンドウなどの雑草は完全に抑えきることができなかった。

しかし、年間2～3回の除草作業を組み合わせれば、景観維持効果は十分に発揮されることも確認された。そして、除草作業も回を重ねる毎に草量が減少するとともに労働過重も一般的な荒廃のり面の除草作業とは比較にならないほど軽微にできることも確認された。

また、年数を経る毎に大型雑草は減少するがカラスノエンドウ、シバ類などの匍匐型雑草は残る傾向にあることが確認できた。

■ 今後の課題

- 1) 植物を利用した新緑化資材の検討
- 2) 宿根性雑草（草種、草量）の経年変化の確認
- 3) 匍匐型雑草（カラスノエンドウなど）の抑草対策
- 4) 管理作業の簡素化
（省力、低コスト）



施工直後



施工後31日目



施工後103日目



現場での施工事例（南あわじ市）